

題材を掘り下げる指導

西村秀之

(横浜市立富士見中学校)

1. 教科書は宝箱

教科書の新しい単元に入る前に、年間計画は立ててあるが、改めてその単元を見てみる。教科書を扱う際には、その単元の新出文法事項とともに、題材にも大いに注目する。教科書には、本当にさまざまな分野にわたる興味深い題材が散りばめられている。日本や他国の文化、環境問題や平和問題など、スペースも限られている中、独力でこれだけの題材を扱い、かつ中学生に理解され伝わる英文を作ることにはなかなか出来ることではない。教科書は宝箱だと思う。かく言う私自身は、教員になり教え始めた頃は、題材を読み深めるなどと考えたことはほぼなく、その面白さに気付くことも少なく、教科書以外の言語活動に目を向けていた一人であった。

しかし、そんな私に題材の面白さや深さを気付かせてくれたのは、当時使っていた *NEW CROWN* だった。Book2の Pete Gray (“A Major Leaguer with One Arm”) の話であった。Reading 教材として載っていたものであるが、内容理解をした後に、生徒たちにグループでの音読発表を課した。生徒たちは教科書に載っている情報以外にも、その人物がどのような人物であったか、どのような人生を送ったのかなど、表現しようとすればするほどさらに知りたくなり、こちらが持っている情報以上のことを質問してきたのであった。生徒たちの音読発表は、Pete Gray の生き様をより事実に沿って表現しようとした大変素晴らしいものであった。それは、題材を深めていくことの大切さを、生徒たちの生き生きした英語で表現する姿から意識させられた時間であった。

2. 題材に込められたメッセージを読む

その題材に込められたメッセージは何か、生徒たちにその題材を通してどのようなことを感じ、考えてもらいたいのか、単元に入る前にいろいろ思いを巡らせる。ただ教科書の英文を確認するだけではもったいない。教科書の文章を通じ、どのように生徒たちの気持ちに響かせていくか。まずはその題材について、TM やインターネット等を通じて、自分自身の知識を深める。新たな発見をすることも少なくない。そして、生徒たちに題材をどうつなげ、その題材について生徒たちに最終的に何を求めていくか(何を考えさせたいか、何を感じて欲しいか、意見文を書かせる、クラスで意見を交換する、など)を決定する。そして、その目標に向けて教科書の本文をどのように扱い、また、プラスのインプットには何が必要か、それをどう展開していくかなど、具体的に授業計画を練っていく。ワクワクする楽しいひと時である。

3. 内容理解を自分につなげる

私はとくに、*NEW CROWN* Book3 の後半 “I Have a Dream.” そして “A Vulture and a Child” と続くところを好んでいた。題材としては深刻で、かつしっかりととらえていかなければならないところなので、より気が引き締まる思いである。しかし、どちらの題材も、3年生後半に考えさせたり、感じさせたりするのにふさわしく、また、ぜひ持っていてほしい視点であった。キング牧師のレッスンでアメリカの黒人社会の歴史などに触れた後に、ハゲワシと少女のレッスンで世界に目を向けてみる。

生徒たちにまず“A Vulture and a Child”の写真を見せると、「かわいそう」「何で助けられないの？」などの声上がる。レッスンの始まりである。そこで、Sudanの現状などを教科書の英文をもとに“problems”に注目させながら、またプラスの情報も読み物教材として提示しながら、現状を把握していく。

「へえ、そうなんだ」「知らなかった」の声があがる。

ほとんどの生徒たちは、まずSudanという国の存在すら知らない。Sudanという国がどのような国なのかということを理解し、認識することなくして、この写真について考えることはできない。

Sudanについて知った上で、改めてpicture cardを見せる。そして、この写真の撮られた状況、写真が発表された後のこと、Kevin Carterを取り巻く状況を、教科書から読み取る。さらにKevin Carterについて、その後の人生（後に彼は自殺をしてしまう、など）について話して聞かせ、そして読ませる。初めて写真を見た時には、「かわいそう」「何で助けられないの?」と言っていた生徒たちも考えこんでいる。

さまざまな背景を知った後に、改めて写真について尋ねてみる。すると、「写真でSudanの現状を知らせたかったのだから撮ってよかった」など、これまでとは異なる意見も出始める。その一方で、「一人の命は大切。撮るよりも助けるべき」といった反論も出てくる。「写真を撮ってすぐに助けてあげればいいよ」など、背景を踏まえ、一人ひとりがその立場にたって考えるところから、さまざまな意見が出てくる。いろいろな意見を聞いた後に、自分の意見をまとめる。そして、次のセクションの読み深めへとつなげていく。

“Even a simple action, like taking photo, can have two sides.”この文章の意味をとらえる。そして、生徒たちに投げかける。

「事実を知り、いろいろな見方があるんだ、ふ〜んというだけで、よいのだろうか。」

このLessonで掘り下げてきたKevin Carterの写真をめぐる話に思いを巡らしているのだろうか、生徒たちはしばらく考え込む。

「募金する」「何を送ればうれしいかな」など、意見

が出てくる。こちらがたどり着かせなかったゴールの1つであった。Kevin Carterの写真の是非について正解はない。報道することの難しさ、報道の意義を理解させると同時に、物事にはいろいろな見方や考え方があることを生徒たちに知ってもらう。その上で、自分だったらどうするか、自分だったら何ができるかなど、最終的に題材を自分自身のことに結び付けて考えさせたかった。その後、生徒たちには、Kevin Carterの行動についての自分の意見やSudanの現実を踏まえ、自分にできることは何か、自分だったらどうするか、というテーマで教科書を読み返させながら、writingによってこのLessonを締めくくった。

4. ねらいをもった発問で深める

題材を掘り下げる視点は常に持っていたい。しかし、掘り下げることで授業の年間計画に支障が出てしまっては困る。掘り下げるといって、大きなプロジェクトを考えたり、時間がかかるのでは、と考えがちだが、それはちょっとしたサジ加減でできるのではないかと思う。“A Vulture and a Child”では、教科書の本文、キーワードをもとに、さらに情報を付け加えたいところでは+αの読み物を準備したが、それ以外は、題材の何を考えさせたいか、どのようなメッセージを感じ取ってほしいか、という意図に合わせた教師の発問によって、題材を深めていった。授業時間からみても、まったく負担にならずに進めることができた。

まずは、単元に入る前に教科書を読み、自分自身がその題材に興味をもつこと、私はそこから始めている。英語という1つの言語の習得を目指して生徒たちの可能性を広げるとともに、題材の内容を、少しの工夫で深め、生徒の心を揺さぶることで、生徒たちの人間的な深さや幅を深め広げていけたら、という思いを込めて授業を組み立てていきたい。

生徒たちはメッセージをどう受け止め、どう考えてくれるだろうか、ワクワクしながら今日も教室に向かおう。

*授業でのやり取りは英語で行われている部分もありますが、本稿では日本語で表記しました。